
ウィステルアーウィ王国物語

虚木綿寧悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウイステルアーウィ王国物語

【Nコード】

N9627M

【作者名】

虚木綿寧悠

【あらすじ】

外面的には堂々として威厳たっぷり内面はグチったれで後ろ向きな王様と、記憶喪失で常識がない奇矯な行動ばかりとる「え、大賢者ってかしこいんじゃないの？」な大賢者と、その他愉快だったり愉快じゃなかったりする仲間だったり仲間じゃなかったりする人たちが織りなす、基本的にゆるゆるな異世界ファンタジー。
現在週に一回更新を目安にしています。

第一話 王様、即位する

ふう、と息を吐くとこぼりと泡が口からこぼれていく感覚と音がした。あれ、と思つて目を開くと、ゆらゆらと揺れる明かりが遠くに見えた。驚きとともに息を吸いこもうとしたが、口から流れ込んできたのは液体。反射的に咳込んで、空気がさらに肺から出ていく。代わりに入ってくるのは水だ。苦しい。

上、下、平衡感覚がないがおそらくあの明かりがあるほうが水面だろう。混乱しながら必死に手で水をかく。どうやらそう深い場所にいたわけではないらしく、すぐに顔が空気に触れた。必死で手足をばたつかせながら空気を取り込む。水を吐いて、思う存分息を吸つて、ついでにくしゃみをして、あー、鼻の奥が痛い。

暗くもない、明るくもない部屋……ここは部屋でいいのだろうか。そもそも私がなぜか沈んでいたこの、この……なんだ？ プール？ 目で半径二メートルほどの円形、深さは不明なプールが床になっているのだ。扉と壁と天井は、ある。木製の無駄に彫刻で飾り立ててある重そうな扉と半透明で青っぽい色のごつごつとした岩か、ガラスのような壁と天井。天井を見上げると、水面だろうと判断する元になった明かりがぼんやりと浮かんでいた。

……え！？ 浮かぶつてなんだそれ。炎じゃないな、ぼんやりとした明かりだから直視しても問題はないが、電球も見えない。正体はなんだと思つて見ていたら沈みそうになった。危ない危ない。着衣水泳は苦手だ。しかも立ち泳ぎなんて疲れることやつてられるか。

じゃぶじゃぶと音を立てながら、とりあえず扉の近くまで移動する。静かで全く物音がしない分、水音が耳に障る。蝶番が見えるってことはこの扉は内側に開くんだな。誰かが開いたときに顔をぶつけても嫌だし、少し脇に寄って壁に手をかける。うん、滑らないし服を着ていても沈まない。素晴らしい。後はこの水がお湯だったら言うことないんだが……水だな。長い間浸かっていると冷えそつだ。でも、外に出ようにもここからだどドアノブに手が届かない。あーもう、なんでこんなことになってるんだ？大体、さっきまで私は……。あれ？

何、してた？

いや、そもそも。私の名前は、なんだ？

ウイステルアーウイ王国。人であり、水の精霊でもあつたと伝えられる初代、健国王の御世から二百四十余年の歳月を数える豊かな国。時に小競り合いなどが起きつつも、周辺諸国との関係は安定しており、大きな争いがないために英雄は吟遊詩人たちの語りの中だけでは存在しない。

王国の危機には健国王の良き理解者であり友である大賢者が狼とともに現れる、などという伝説もあり、これまた吟遊詩人たちの十

八番で人気のある歌なのだが、なにぶん大きな災いらしいものに遭遇することなく平和に発展してきた王国なので事実かどうか判断するすべもない。この国はそんな平穩に浸る国であった。

ウイステルアーウイ王国の首都、サファーエルに代々の国王が生まれ、死んでいった王城がある。城、とは言ってもそれはすでに街だ。王が住み、執務も行う狼宮、王妃が住まう月宮、水の精霊を祀っている狼霊宮、部外者を招き滞在させ、あるいは式典なども行われる迎宮が主な建築物だが、他に傍系も含め王族が住む小狼宮、王の信頼厚く位の高い貴族に居住が許される晶宮が数多く存在する。いずれもその宮の持ち主の権勢を誇り、あるいは国の威信を示すために豪華なつくりをしているために目に楽しい街並みとなっている。

城壁の内に存在する建物はそれだけではない。出入りの商人の休憩所や使用人達の滞在所なども含めれば、数百の建物が城壁に囲まれている。そして、街と城を隔てる城壁の近くに、民に向けての演説を行うための豪華な建物がある。居住用ではないために宮とは呼ばれず、単に告知館と呼ばれるその控室に、後数刻で八代目の王になる齡16の王太子、ウイルト・デイイ・サツバシア・シンシア・ウイステルアーウイは居た。

ウイルトはイスに座り、うつうつと床を眺めていた。目に入るのは毛足の長い、複雑な模様と配色の絨毯と、それを踏んでいる普段より一層豪華な靴をはいた自分の足だ。目に入る服の裾もきらびやかで自分を落ち込ませる。王国の守護獣とされる狼が銀糸で縫いとられ、貴色の青をふんだんに使い、天藍石、藍方石や青金石などで飾り立てた衣装。王族特有の青眼青髪と相まって人を圧倒させ、従わせるだけの威容を誇っていたが、それを身に纏う本人の表情は冴えない。見た目は、悪くないのだが。

「殿下」

声をかけたのは祭祀をつかさどる狼霊府の長官、アルフェイト。有力な貴族の二男として生まれ、水霊との感応力の高さから狼霊府に入った。幼いころからの訓練で、国では一番の水霊使いであると評されている。狼霊府に勤める者の慣例として、名字は名乗らない。王族の血がいくらかは入っているのだろう、薄い水色の瞳をしている。髪は薄墨。今年で26歳と年若いものの自分の貴賤を問わず信頼の厚い彼もまた、常になく豪華な衣装を身にまもっていた。狼霊府の長官は健国王から、貴色の青を身につけることを許されている。もつとも、代々の長官はその許可を畏れ多いとして淡い青、水色しか使用しないのが慣習となっているので、今日来ている服も白い布に水色の糸で複雑な文様を刺繍しているだけだが。

「アル、なんで僕が王……」

「今更それか、殿下。決まっているだろう、他に居ないからだ」

「そうなんだよね！そりゃわかってるけどね！」

「そうやけを起こすな。心構えができないことを責めるつもりはないが決定事項だ。あきらめろ」

やけを起こし始めたウィルトとは裏腹に、アルフェイトは冷静に言葉を紡ぐ。もともとウィルトは先代の王 諡号は豊潤王となつた の四番目の子供でしかなかった。直系男子として王座が遠い

わけではなかったが、近いわけでもない。ウイルトは自分の一番上の兄が王になるだろうと、自分は歴史でも研究しながら一生を終えるだろうと思っていた。

そして、落ち着いてはいるものの、アルフエイトとしても現状を予測していたわけではなかった。彼は第一王太子が将来自分の主になるだろうと思っていたし、第二王太子であるウイルトは将来王弟として王を支えるか、あるいは政治の世界には関わらず研究者になるかのどちらかの道を進むのだろうと思っていた。いわゆる『ご学友』として王子や姫と心安く関係を結んではいたが、将来仕えるべきと主君の兄弟という意識は忘れていなかった。第一王太子のマハーウイは彼にとって気心の知れた友人であり主君であり敬愛の対象だった。弟のウイルトは……不遜な感情ではあったが、面倒を見てやらねばならない弟といったところだろうか。

周囲の評価も似たり寄ったりであった。豊潤王は直轄地の一部の領主としてウイルトを封じていたが、実務は信頼する臣下にやらせていたし、ウイルトが晩餐会や夜会に出席せずほそぼそと歴史の研究をするのを黙認していた。あれは王になるための能力はあるが、意欲がない。学者がせいぜいだろう、とかつて側近に言っていたことからそれが伺える。

貴族たちも、自分の子弟をあてがうのは基本的にマハーウイに対してのみだった。第一王太子に近づけない、あるいは少し競争に出遅れた貴族などはウイルトの取り巻きになることがあったが、圧倒的に数が少ない。本人がもう少し野心的な性格をしていれば王弟としてそれなりの地位に就き権勢を振るうことを予測して多くなっていたのだろうが、剣や英雄に多少なりとも憧れる年頃にもかかわらず愛読書は歴史書、お忍びは遺跡の発掘という毎日だったのだから貴族の地位固めの役には立たないと判断されたのだ。まあ、間違っ

た判断ではないと本人は思っている。むしろ見る目の的確さに感心していたのだ。

豊潤王の二番目と三番目の子供は女性だった。ウイステルアーウイの王位継承は他国と大きく異なり、実子であれば性別にかかわらず年齢の高い順に王位に近くなる。第一王女と第二王女、どちらも王座に就く可能性はあった。しかし、豊潤王が崩御する前に二番目は山脈を越えてソルタニーエ王国に嫁ぎ、三番目は国内の有力貴族に降嫁した。つまり、二人ともウイステルアーウイの王位継承権は放棄したことになっている。

一番目の子供は男性だった。誰もが彼を次期国王と考えていたし、本人もそれを自覚し学んでいた。多くの栄達を望む貴族に取り囲まれ、帝王学を学び、優秀で利発だと評判だったし、彼自身よき王でありたい、民を豊かにしたいと考え真面目に学んでいた。兄弟仲も悪くはなかった。ウィルトは一番上の兄、マハーウイを慕っていたし、マハーウイ自身も覇気が薄いが気立ては良いと貴族たちとうわさされていた弟のことを家族として気にかけていた。

しかし。豊潤王が体調を崩し朝議を欠席するようになったころから、傍目に見てもわかるほどにそわそわし始め、そして二十日ほど前。自室に

『添い遂げたい女性がいるので家出します。
廃嫡してください。』

王家の紋章が付いたものは何一つ持ち出しませんし、実子は持ちません。

子供が欲しくなったら養子をとります。探さないでください。

マハーウイ・エイ・サファーエル・シンシア・ウイステルアーウイ改め、

の書置きを残して失踪したのだ。すぐに秘密裏に捜索隊を出したもののそれなりに優秀な諜報員たちが痕跡を見つけることが出来ずに今に至る。報告を受けた病床の豊潤王は激怒し司法長官をわざわざ自室に呼びよせ、ありとあらゆる公文書から一番目の名を削除するよう命令し、その場に駆け付けた宰相と医者になだめられていた仮にも一国の第一王子、情報操作の準備が整う前に民や他国に知られたら思わぬ波紋を呼びかねない。

親子の語らいでも、との配慮でその場にいたウィルトも宰相とともに父をなだめようとしたが、その際にいきなり宣言されてしまったのである。

「父上、兄上もそのうち反省して戻ってくると思いますし……」

「あのような者、すでに王太子とは認めん。ウィルト、私の死後、王座はお前に任せる。元の性格はどうであれ、お主一時的に堂々とえらそうな演技をするのは得意だっただろう」

「へ！？いや、僕にはとても勤まりませんから！兄上なら……」

「ならん」

「そんなこと言わずに！王になったら歴史の研究をしたり発掘調査に行ったりできなくなるじゃないですか！」

「死にゆく親の願い事も叶えないほどに薄情であったか」

「いやいやいや、それとこれとは話は別です。父上の望みならかなえて差し上げたいですし王命は絶対ですけれども」

「ならばウイルト。王として命ずる。お前が次期国王だ」

「なんでそんなに即断即決なんですか。父上はもつと落ち着いて物事を吟味してから命令を発してらしたでしょう!？」

「他に人がおらん。吟味するような選択肢はない!」

「ですから、兄上が!そりゃ大々的に探せはしませんけどすぐに見つかりますよ!青眼青髪は目立ちますし……」

そこまではまあ、良かったのだ。いや、一国の命運をかけた後継者の問題を語らうには少しふざけたような空気が漂っていたが、豊潤王は大きな問題も小さな問題も、困った様子を見せることなく家族の前で軽口をたたきながら解決していくのが常だったから、ウイルトは必死で反論しつつもいつもの本気とも冗談ともつかない繰り事だと考え、寝台に横たわる父と言葉を交わしていた。

だが、豊潤王は家族を前にした時の親しみやすい空気ではなく、貴族や官僚たちを前にしたときの、これが王か、と思わせる空気をまとったのだ。

「ウイルト。マハーウィは、この国に住む百万の民の命と現在と未来を放り投げてただ一人の為に生きると宣言してしまったのだよ。あれは、私のかわいい息子だ。息子としての愛情に変わりはないが、民を見捨てると一度でも行動に示した人間は王である資格を持

たないのだ。わかっているだろう。

……さがれ、ウイルト」

その十三日後に王は崩御し、翌日謚号として豊潤の名が狼靈府からおくられ、そして次期国王としてウイルトが指名されてしまったのだった。

「ああもう……有力貴族の後ろ盾なんてほとんどないんだよ、僕」

「それはわかっている。だからと言って反乱を起こすほど気概がある貴族がいるわけでもあるまい。俺も狼靈府の長官としてお前の即位を全面的に認めているし」

「なんで認めるんだよう」

「認めなかったら大事だろうが。先々代の王の弟たちの息子が一番近い血縁になるが、逆に候補が多すぎる。国を割る政争になるぞ」

その言葉にウイルトはため息をついた。ウイルトは争いを好まない。歴史の研究を衣食住が保障された環境で出来れば満足だ。むしろ王という最高権力者が忙しいのは父や兄を見て知っているのなりたくない。なりたくないのだが、自分が逃げ出したせいで政争がおこる、庶民の暮らしに気を配る余裕がなくなるというのも避けたいのだ。

国が荒れると遺跡も荒れる。ひいては彼の好む世界の過去を見る

作業も難しくなってしまうのだ。それになにより、もうすでに民の前で行う戴冠式の準備はできてしまっているのだから、これはもう、最後のあがきというか無駄な行動に過ぎない。

「手順はおぼえてるな、殿下」

「おぼえてるよ」

「『陛下』になったらちゃんと敬語を使ってやる。楽しみにしておけ」

「敬語を使うアルか。不気味だねえ」

「……自覚、しろよ？王は至高の存在だ。賢者以外の人間が対等に口を利くことは許されてない」

「ああ、うん、そうだよな」

「俺はもういくぞ？殿下の頭に王冠を載せるのは俺の役目だからな」

「そう、だね。ありがとう」

緊張を緩和させるために必要ないのに直前まで控室に居てくれたアルフェイトに、ウィルトは感謝の言葉を述べた。

「どういたしまして。……身分にかかわらず感謝の気持ちを伝え

られるのは人としては美德だが。王になったら気をつけるよ、お前の発言一つで家が興亡するから」

ウィルトは微妙に物騒なことを言ってから退室したアルフェイトの、心の中では兄と思っている人の背中を見送った。入れ替わりに大勢の女官たちが仰々しい上掛けを持って入ってきた。灰色の毛皮で縁取られた、見るからに重そうな青い布で作られている。銀の糸で狼が縫いとられているのは王のみが着用を許された印としてよく目にするが、煌びやかさでは見たことがないほど飾り立てであった。

促されるままに立ちあがって、彼女たちが自分の方に上掛けをかけ、留め具で止めていくのを姿見で見ると、今自分が来ている服も重い。上掛けにはさらに様々な衣装が施してあるためさらに重く、ずしりとのしかかる重さに意図せずとも眉間にしわが寄った。

「ウィルト殿下。恐れながら申し上げます」

女官たちに指示を出していた女官長がウィルトの前に膝をついて声を出した。

「直言を許す。面おもてをあげよ」

ウィルトの声に、伏せていた顔を女官長があげた。ふっくらとした笑い皺のついた顔だが、今日は真面目な硬いともいえる表情を浮かべていた。老齢に差し掛かったが輝きを失わない青い瞳が揺れることなくウィルトを見据える。

ウィルトが王位を継ぐと決まった時から女官長は一事が万事この調子だ。騎馬訓練をサボった時に優しく、それでもしっかりと叱ってくれていたことを考えると寂しいような物足りないような気がするが、今まで通りにしろと命令したところで女官長が周りからひんじゅく輦蹙を買っただけだと理解できるぐらいにはウィルトは気がまわる。最初は面食らったが、ウィルトは自分が良ければそれで良い、と言いきれるほど図太くはない。仕方がないのであきらめて、女官長の接し方を受け入れることにした。

「上掛けを重いとお思いでしょうか」

「重いな」

「これより殿下の肩に乗るはウイステルアーウィ王国百万の民の命です。その重さは私ごときに図れるものではございませんが」

返答に困ったウィルトは、そのまま言葉を続けるよう促した。

「今日この日、この上掛けを重いと感じたことをお忘れなきようお願い申し上げます。民の命とは比べようもなく軽いものだということも。」

殿下の一言でこの国が決まります。右と左、選択肢を誤ることでは何十万の民が辛苦を舐めることにもなりましょう。その、「ご自覚を」

女官たちとともに入っていた狼霊府の若い巫女が上掛けのすそを持ち上げた。長く重いため、儀式に使うこの上掛けは巫女がすそを持ち歩くことになっている。女官長はすそを持ち上げた巫女に視線を移し、少しばかり微笑んで見せた。

「そして、進む先は殿下のみがお決めになることですが、重さを減らすお手伝いならばできますゆえ。これより私どもは殿下の手足となり働かせていただきます。ゆめゆめ自分が一人であるとは思わないでいただきたいのです。……さ、お時間のようですね。行ってらっしゃいませ、殿下」

女官長は跪いたまま一礼し、壁際に下がった。開かれた扉からは歓声が聞こえる。昨日までは豊潤王の喪に服していたのだが、今日は一転して新王の即位を祝う祭りだ。第二王太子が即位することになったことに多少の戸惑いの声が聞かれたが、所詮顔も見たことのない、言葉を交わすこともない相手だ。新王即位というめでたい言葉で戸惑いは打ち消され、空気は熱気を帯びて騒がしくなる。これからウィルトは、王になるのだ。女官長の言葉は重いが嬉しい。微笑んで、声をかけた。先ほどアルに注意されたばかりだが、これはかまわないだろう。

「ありがとう、女官長。これからもよろしく頼むよ」

露台に出ると熱気が直接叩きつけられるような気がした。即位する王を一目見ようと集まった国民の表情を見分けられるほどに近くはないが、男女のべつをつけられるほどには近い位置に露台は作つてある。警備をしている甲冑を身にまとつた近衛騎士がいるため警備上の不安はないが、生きた人間の、それも大衆と違っていいほどの数の人間の熱気には凄まじいものがある。表情に出さないもの、すこし気おくれしつつウイルトは王冠を乗せた台の隣に立つアルフエイト目指して歩いた。堂々と威厳たつぷりな演技は忘れない。

狼霊府の長官は王以外に頭を下げる相手を持たず。名目上、この国に彼より立場が上な存在は王しかない。無礼な発言などはとがめられるが、王でない王族に対して不敬罪が適用されることはない。だからこそ、戴冠式などというものが成り立つのだ。

アルフエイトの前、あと五歩といったところでウエイトは片膝をつき下を向く。

「ウイルト・デイイ・サツバシア・シンシア・ウイステルアー
ウイ。水の精霊に祝福されたこの良き日に私、狼霊府長官アルフエイトは汝に王冠を授ける。水の精霊よ、これよりこの国を率いる彼に加護を」

視界の端でアルフエイトの靴が近づき、ウイルトは頭に重さを感じた。靴がまた数歩下がるのを見てから立ちあがる。気がつけばうるさかった歓声は消え、張りつめたような静寂が辺りを覆っていた。

誓いの言葉を述べようと口を開いたとき、大地を揺るがすような低い音が聞こえた。唸り声、それも人ではなく大きな獣の発する唸り声のようだった。騎士たちは先ほどと違い、民ではなく唸り声の主を警戒するかのように辺りを見回している。生きた獣の声ではないかもしれない、と表情に戸惑いを出さないようにしながらもウイルトは思う。どこから聞こえる唸り声なのか判然としないのだ。やがて唸り声はやみ、一拍置いて狼の遠吠えへと変化した。これは、海のほうから聞こえる。そして、狼はこの国の守護獣だ。あるいは自分の即位に箔をつけるためアルが何かをしたのだろうか、と思つてウイルトはアルフェイトの顔をさりげなく見たが、目があつた彼は周りには悟られぬようにかすかに首を横に振つた。

海の側から、というのは珍しいが、城を挟んで首都の反対側には山がそびえている。そちらには狼が生息しているしたまたま遠吠えをしたのだろうとウイルトは納得し、儀式を続けようと口を開いた。狼は守護獣であり、神聖なモノだというのはウイステルアーウィに住む人ならば生まれた時からすりこまれていた。吉兆としてみなす人が多いだろう。

狼の声だ、という囁きはどこからか広まり、民の視線は期待を増してウイルトに集中した。王冠が重い、と思いつながらウイルトはアルフェイトに向かって数歩近づく。今度は逆にアルフェイトがウイルトに対して膝を折る。すでに狼霊府から王として認証され、王冠をかぶっている彼の身分は狼霊府長官よりも高い。

「狼霊府長官アルフェイト、そしてこの場に居る我が民たちよ。しかと聞け。我はここに宣言する。水の精霊の加護のもとに、第八代ウイステルアーウィ王国国王としてさらなる繁栄をこの地に約束しよう！」

途端、爆発的に歓声が上がった。国王陛下万歳、ウイステルアー
ワイ万歳、などの掛け声も聞こえる。ウィルトはしばらくその様子
を眺めていたが、視線を先にやって眼を見開いた。一步下がった場
所で膝をつき控えていたアルフェイトは、かすかに身じろぎしたウ
ィルトに不審を覚えたのか、顔をあげて視界を共有する。

首都、サフアーエルは港町だ。王城は川を上った先にあるため港
がすぐに見えるほど海には近くないが、それでも露台のような高い
場所からは遠くまで見渡せる。民の向こう、街の向こうから勢いよ
くかけてくる蒼い姿が見えた。四足で空を蹴る何か。見る見るうち
に大きくなるそれに、アルフェイトは腰にさした杖に手をかけた。

即座に抜いて戦闘態勢を整えなかったのは、周囲の安全確保のた
めに散らしていた水霊が警告を発していないため。普段であれば即
座に水でとらえるのだが、近づくその姿が鮮明になるにつれ驚きの
表情を隠せない。水が形をとったように揺らめき、輝く蒼い狼。ウ
ィルトが何か、と思ったのだが彼は身を強張らせて狼を見ているだ
けだ。とてもではないが何かをしているようには見えない。ただ、
人前で動揺を表すなという王族の責務は心得ているようだ、演技が
うまいとは思っていたがここまでとは、とアルフェイトは年下の『
陛下』を見やる。水霊たちは警告を発するどころが喜びの感情をア
ルフェイトに伝えてくる。ウィルトは自分ほどではないが水霊との
感応力があるはずだ、危険がないと判断したのだらう、視線の先で
握りしめられていた拳は少しずつ緩んでいた。

「陛下、危険はないようです。慌てて下がるわけにはまいりませ
んのので申し訳ございませんがしばらくの辛抱を」

「わかった。ところであれば建国記にある大賢者の狼に見えるんだが」

「断定はできませんが、似通っているように思います。水が狼の形をとった、と狼霊府では伝えられておりますので」

そうか、とウイルトが呟くと同時に狼は大きく跳躍する。露台に面した広場に集まった民の頭上を超え、露台に降り立つと一度、遠吠えをした後に顔をウイルトの腰辺りに押し付ける。思わず、といったようにウイルトが手を伸ばし、狼の頭をなでる。見た目と異なり、少し硬い毛皮の感触がした。満足そうに頭を振った狼はそのままウイルトの影に足を踏み入れ、そのまま姿を消した。

獣の登場にいったん静まり返っていた広場は誰かの聖獣だ、という叫びから混乱の渦に巻き込まれた。狼の形をしているが、狼ではない何か。国が祀る、水の精霊が形をとったような姿。貴色である青という、獣としては不自然な色をした何か。

それは人々に伝説を思い起こさせるには十分なイキモノだった。

「……びっくりしたあ」

控室に戻るなり、椅子に座って背中を丸めウィルトは呟く。対外的に演技していた堂々とした姿はどこへ消えたと言いたくなる態度だった。最も、アルフェイトはウィルトと十年近い付き合いがあるのだ。彼の演技している時としていない時の差に離れている。気がかりなことをすぐに質問した。

「陛下、お体のほうに問題は？先ほどの狼、陛下の御影に」

「居るのはわかるよ。でも使役霊みたいに僕の言うことを利くわけじゃないみたい。属性は水みたいだから相性は悪くないんだけど」

「さようでございますか」

「多分だけど他の誰かと契約してるんじゃないかな、もう。にしても本当にアルの敬語って気持ち悪いね」

「……陛下」

「今はだれもないからいいだろ」

「どこに耳目があるかわからんだ、やるなら自室と執務室だけにしておけ。女官たちが来るぞ」

やってくる女官たちに上掛けと王冠を渡す。おそらく宝物庫の責任者に渡され、次の祭典まで保管されるのだろう。

「ちょっと疲れたけど、まだ続くんだよ、儀式」

女官たちが去り、扉が閉まるのを見届けてからウィルトは声を出した。

「そうだ。まあ、形式的なものだが、狼霊府の水の間で大賢者に就任の報告をする。体調に本当に問題がないのであれば、このまま行きたいのだが」

「じゃあさっさと行こう。大賢者の間ってあそこだよ？僕が立太子の儀をやらされたところ。床が氷で壁が水晶の」

「そのはずだ。氷の下に人がいたか？」

「いたいた。大賢者なんですよ、あれ？黒い髪の綺麗な人。眼は閉じてたから何色かは分からないけど」

「生きてるらしいぞ」

「氷漬けなのにね。さすが大賢者」

「さて陛下。ご案内させていただきます」

「ああ、頼む」

部屋を出ると同時にアルフェイトは表情と口調を改める。その見

事な切り替えに笑えばいいのか悲しめばいいのか微妙な感情を覚えながらウィルトはアルフェイトの後に続く。アルフェイトのほうもウィルトの切り替えに感心しているのだが、どうやらそれには気づいていないようだ。

中庭をいくつか通り抜け、狼霊宮に正門から入る。多くの巫女や神官たちが出迎えているのに軽く頷き返しながら二人は奥の部屋へと足を進める。

一番奥、普段人が立ち入ることのない一角の、重厚な扉の前でアルフェイトは立ち止った。体系的に魔術や精霊術を学んでいるアルフェイトにすら理解しきれない理由から狼霊宮の廊下は複雑怪奇な文様を描いている。新人は先輩がいないと指示された部屋に到着できず、慣れた人間でも気を抜けばすぐに迷うとあまり評判が良くない。改築されないのは、護国に必要な機構だと認識されているからである。

そのような場所だからこそ、ウィルトにはすでに自分がどの方角から入ってきたのかもわかっていなかった。扉の文様は一つ一つ違って意味があるらしいが、それを理解できるのはやはり狼霊府の人間のみ。瑣末な模様の違いを見分けるのすら困難なため、ここが大賢者の間だ、とアルフェイトに言われてもそうなのか、という感想しか抱けなかった。

「民の前での宣言と違って特に威厳を持つ必要もかしこある必要もない。豊潤王も名前と王になるってことを適当に言っただけで終わったらしい」

決まった型などがある儀式なのか、と尋ねたウィルトだったが、帰ってきた答えは実にやる気がなかった。

「ふうん。なら僕もそれでいいや」

促されるままにウィルトは扉の取っ手に手をかけ、扉を開く。そのまま足を踏み出そうとして息をのんだ。

視線の先にあつたのははとけることがないと思われた氷ではなく、かすかな空気の流れによって揺らぐ水面^{みなも}。

そして、こちらに向かって無表情に手を差し伸べる、黒髪黒目の人間だった。

第一話 王様、即位する（後書き）

批判意見など、大歓迎です。

長い短い、くどい説明が足りない、そもそもこの話面白くないんですけど、などありましたらよろしくお願いします。

目指せ週一更新で頑張りたいと思います。

第二話 王様、大賢者を拾う

全く、自分が誰だかわからない記憶喪失なんてものに本当になるだなんて思わなかった。実在する症状だったんだなー、記憶喪失。ドラマとか小説の世界でならよく見るけどね。ちゃぶりちゃぶりと水に揺られながら、あえて遠い目をして天井を見上げる。他に人がいないのだから完全な独り芝居だけど、一人つきりでわけのわからない所に居るといっても怖いものだ。気を紛らわすには必要だろう。

最初の記憶が水の中、危うく溺れそうになるだなんてあまり歓迎したくない事態ではあるのだが。泳ぎ方も水面の方向の判断の仕方、今現在こうして思考するための言葉もおぼえているのに自分に関することは全くわからない。ということは全生活史健忘といったところかな？多くは心因性のはずだが、私はなにか大きなショックでも受けたのだろうか。まあ、少なくともこのプールらしきものに服を着たまま入る程度には何かがあったんだろう。まさか入水？…ま、仮にそうだとしても今は死にたくないわけで。気にしなくてもいいかな。

手がドアノブに届かないからこの部屋から出るわけにもいかないし、何よりこれ以上水につかっていると低体温症になりそうだ。誰か来て私を助けてくれないだろうか。ダメもとで大声を張り上げて助けを呼んだほうがいいのだろうか。現れるのがどのような人間かわからないとそれも躊躇される。室内にこんな妙な部屋を持った人間というのは分類として「まともな人間」なのだろうか。だってこのプール、明らかに一度中に入ってしまうとドアを開けられないじ

やないか。

いや、しかし私が不法侵入をしたのではない限り、私を見知っている人間がいるはずだ。不法侵入というのは私の中でやってはいけないことに分類されているようなので、おそらくこの部屋の主は私を知っているだろう。なら助けを呼んだほうがいいのか。うーん、ふんざりがつかない。私がこのプールに入ったのではなく、入れられた、という可能性だってあるのだ。というか、入れられた、のほろが自尊心は満たされる。自分が出られないプールで進んで泳ぐような馬鹿な人間だとは思いたくない。例え自分の名前や顔を思い出せなくても自尊心というのは立派に働く感情なのだ。今知ったけど。

おや。ドアノブが動いている。扉を開くのはどのような人物だろう。自分から呼ぶのはともかく向こうから来てくれるというなら仕方がない。覚悟を決めようじゃないか。

恐れと期待を半々に抱きながら見上げた私の視界に入ったのは、夏の空のように深い青の髪と眼をした少年と、かすかに青味がかつて見える灰色の髪に水色の眼をした青年だった。舞台の衣裳のような、凝った作りの服を着ているが、なにより。どちらもイケメン。人類の敵め！

ウルトは黒い双眸を見つめた。この国の貴族は多かれ少なかれ王族の血が入っているため、普段見慣れている人の瞳は青系統の色が多い。最も、ウイステルアーウィ随一の学芸都市として名高く、周辺諸国からも人が集まるイブティカールではソルタニーエの赤ルグスの銀、シエルバの金、流浪の色なし、それらの血の混ざり合い、薄くなつた平民の茶などを見ることが出来る。ウルトはイブティカールの大学で歴史を学んでいたため、様々な色合いを持つ人間と交流があつたが漆黒といえる眸や髪を持つ人間は初めて見た。

「大賢者……？」

ウルトと同じく絶句していたアルフェイトがかすれた声で呟いた。声を出そうと意識したというよりは思わず口にしてしまった、という様子。まさか、と言わんばかりに呟いた後に片手で口を覆っていた。

ウルトは視線をその『大賢者』らしき人物に戻す。無表情でこちらを見上げていた彼はアルフェイトの声に反応するかのよう濡れた手をこちらに向けて伸ばしていた。手をとれ、と言われた気がして反射的にその手をつかむ。

「陛下!？」

アルフェイトが制止しようとしたようだったが、構わず引つ張つた。掴んだ手が冷たい。その冷たさに生きているのか、と疑問を覚えながらもウルトはさらに腕に力を込めた。水から、というより

も部屋から引きずり出そうとして力を込めると、影から先ほどの狼が飛び出す。形を崩して部屋の水にまぎれたあと、黒眼黒髪の人物の下でその人を背に乗せるように形を取り直した。

「陛下、お下がりください。何者だ、答えよ。私は狼霊府長官、アルフェイトである」

自失していたらしいアルフェイトは気がつけば杖を構えウィルトと黒眼黒髪の人物の間に立っていた。ウィルトが握っていたはずの手はいつの間にかはなされている。

「貴方がたは、」

狼にまたがったその人は、低くもなく高くもなく、速くもなく遅くもない少し茫洋とした印象の口調で話し始めた。

「貴方がたは、私が誰かをご存じではないのですか？」

その問いにアルフェイトは身を固くする。ウィルトも同様だ。アルフェイトの顔を知らない人間は多いだろうが、狼霊府の長官というのは教育を受けていない下層の人間であつたとしても敬意を抱かずにはいられない称号だ。それに対して遜^{へりくだ}ることなく、何故自分を見知っていないのかと疑問に思い問いかけることのできる人物。氷の底に見えていたのと、同じ顔をした人物。一定の手順を踏んだ人

間にしか入れない、狼霊宮奥深くにある部屋から出てきた人物。これは、多分演技をしなくてはならない相手だろうとウィルトは認識し、アルフェイトの肩を叩いて下がらせた。

「いきなりで不躰だったな、謝罪しよう。我が名はウィルト・デイイ・サツバシア・シンシア・ウイステルアーウィ。ウイステルアーウィ王国、八代目の国王だ。貴殿の名は？」

仮に大賢者なら唯一王より上位に立つ可能性のある相手だ。賢者という位は今のウイステルアーウィ王国で国王と対等と認められている。ならばそれより上位の大賢者は……？狼霊府がどのような判断を下すかは分からないがそれなりの対応は必要か、と命令ではなく問いかける形をとってみた。アルフェイトから不満そうな気配は感じない。おそらく対応として間違っではないのだろう。

「王様？」

するり、と狼の背から降りて、その人は音もなく廊下に降り立った。黒い布はずっしりと水を含んでいるのだろう、重く垂れさがっている。

「貴方は王様？」

「今日即位したばかりではあるが、この国の君主だ」

「八代目の、王様」

「偉大なる健国王、エウイト王から数えて八代目だが」

「エウイト王……何年前？」

「今年で建国から二百四十三年を数える」

「知らない……」

無表情だった顔がゆがむ。眉をひそめて口をとがらせる形に。まだ16歳の自分が言うことではないかもしれないが随分と幼い、とウイルトは思った。知らなくて当然だとしても答えたほうがいいのかと迷っているとへくしよい、と大賢者は豪快なくしゃみをひとつする。

「大賢者様、よろしければこちらへ。部屋とお召物を用意させていただきます」

アルフェイトが片膝をつく略式の礼をしてから声をかけた。それまでおとなしくしていた狼が同意するように尻尾を振って、自分の主（なのだろう）の顔を見上げた。狼の表情に変化はないし、そもそも変化があったとしてもそれを見分けることが可能なのだろうか。はわからないが、ウイルトはその狼からどこか嬉しそうな雰囲気を感じとった。まあ、大賢者がいつからあの氷の下にいたのかは分からないが二百年ぶりに主に会えたのなら嬉しいだろう。……二百年とそこまで考えて思わず天を仰ぎたくなったが、アルフェイトだけ

ならともかく大賢者の前であまり威厳にかけた振る舞いはできないと自重した。

連れて行かれた先はアルフェイトの執務室の奥にある、彼の自室だった。なるほど、ここならば誰かがいきなり入ってくることはないだろうとウィルトはうなずいた。驚いた顔で椅子を引いた女官に、アルフェイトは口が堅い女官を数名呼ぶように伝えた。大賢者を着替えさせ、濡れていない椅子をもう一脚運ばせるなど、ある程度準備ができたところでもとから部屋に居た女官　名前はラナーというらしい　だけが残り、茶を杯に注いでから座った大賢者の髪を拭う作業に取り掛かった。貴族階級の成年男性は髪を肩の長さに伸ばすことが多いが、彼の髪は背の中ほどまで届いている。乾かすのに時間がかかりそうだ。

「大賢者様、なぜ急にお目覚めに？」

アルフェイトは大賢者が腰かけた椅子の前で跪いて尋ねる。ウィルトはしばらくどうしようかと迷った後に寝台の上に腰かけた。少し行儀が悪いかとは思ったが、そのまま茶の入った陶器の杯に手を伸ばす。ソルタニーエ王国との境となっているライン山脈付近で取れた銘柄らしい。寒暖の差の激しい高地で採られた茶葉は香り高く甘みが強い。最高級品だと教わった記憶がある。こくり、と嚙下

して息を吐く。式典が終わったら部屋に戻って甘いものを食べながら歴史書でも読もうかと思っていたのに、何の因果かおとぎ話の住人の前で威風堂々とした王の演技をつづける羽目になってしまったのだからため息の一つや二つ、つきたくもなるのだ。

「その、私にもわからないのですが……そもそも、私は大賢者なのですか？」

おいしいですねえ、とふにやふにやした顔でつぶやいていた大賢者は、今度は不思議そうな顔になって首をかしげる。表情が読みやすいのだな、とウィルトは意外に思いながら顔を眺めた。大賢者と言っぐらいだから、老臣たちのような狸を想像していたのだが。表情を読ませない、意図を悟らせない、それでも望むものは裏から手をまわして確実にもぎ取るような人物を。

質問の内容の吟味はしない。もう疲れたのでアルフェイトにお任せだ。彼は自分の職務に忠実だから、ウィルトがわざわざ目を光らせていなくても国や狼霊府の為にならないことはしない。しないだろう。それくらいにはウィルトはアルフェイトを信用している。

「……は？エウイト王を補佐し、建国の礎となった、賢者様でいらっしやいますよね？」

ウイステルアーウィ王国初代の賢者。その知識をもってエウイト王の戦に貢献し、国が成ってから国政に数々の助言を与えた賢者。功績をたたえてエウイト王の死後、公職を辞した彼を呼ぶために大

賢者の呼称が用いられるようになったのだったか、とウィルトは歴史書の記述を振り返る。やはり現在というのは過去の積み重ねからできているものだ。現状の推測には過去の知識が欠かせない。今度歴史を役に立たないと馬鹿にした人間にははつきりと言ってやろう、そうしよう。考えている内容はマトモかもしれないが、ウィルトはそこまで考えた時に自分が現実逃避をしていることに気づいて頭を振った。王族の冠婚葬祭、全てにかかわらせるほどこの国の『大賢者』に対する関心、意識は高い。民衆にも浸透しているはずだ。その大賢者が生きて動いて目の前にいるというだけで……本音を言うなら面倒だ。

「名前をうかがってもよろしいかな、大賢者殿。歴史書には貴殿の名が記されていないのだ」

「歴史書……」

演技は続けなくてはいけないけど、知的好奇心を満たす方向に少し動いても構わないかなとウィルトは一向に進まない会話に口をはさんだ。多少の役得がないと王なんてやってられない。考えてみたらこの人は生きた歴史書だ。読み解き推測するまでもなく二百年ほど前の生活や事件について語ってくれるだろう。

「その、非常に申し訳ないんですが」

「はい」

「名前、覚えてないんですよねえ」

「はい？」

「いや、その。気づいたら水の中に居まして。溺れそうになって慌てて、ここはどこだ自分は誰だと思っっているうちに貴方がたが」

「やってきて大賢者と呼びかけた？」

「ええ。あの、お話伺っているとその大賢者という方がいらしたのは二百四十年ほど前のことらしいので、人違いかと思うんですが……。人ってそんなに長生きしませんよね？」

ものすごく真面目な表情だな、とウィルトは思った。ただ、言葉の中身は真面目ではない。いや、本人は真面目なのかもしれないがさすがに威厳ある王の仮面が外れてしまっそうだ。記憶のない賢者って、賢い者なのだろうか？微妙だろう。言葉を交わす知識はあるようだが、それ以上の常識などは望めないようだし。ただ、幸いか不幸にしてか、『大賢者』というのは本人の資質如何によって与えられる称号ではない。この国において大賢者はすでに固有名詞だ。

「……確かに人は長く生きて七十年、と言ったところではあるが。父は先日五十と少しで身罷みまかったが、長命でも短命でもないという印象を受けたからな。それでも、貴殿は大賢者であろうよ。アル、確認するが記憶が無かるうが彼は大賢者だな？」

「かの大賢者であると公式に認めるためにはこちらの長老会の承認が、それに応じた現在に通用する身分を与えるにはそちらの議会の承認が必要ではありますが。個人的な見解でよろしければこの方

は二百と五十年あまり前に健国王と出会い、われらがウイステルア
ーウィ王国の建国に手を貸した大賢者様であると」

「納得していなさそうだぞ？根拠も伝えておけ」

大賢者はそこはかとなく不満そうな、それでもそれをそのまま口
に出すわけにもいかないだろうなと遠慮しているらしい表情をして
いた。本当に表情が読みやすく愉快だとウイルトは思ったが、逆
に利用されやすいのではとの危機感も抱く。起きるのなら記憶が万
全の状態にいるか、でなければ自分の次の代とかにして欲しかった
と切に願う。

「御意。大賢者様、まず基礎知識として簡単にこの国の説明させて
いただきます。ここは水の精霊の加護を受けるウイステルアーウィ
王国。君主は八代目のウイルト様でこの国の君主として健国王と同
じく青眼青髪。本人も王族として精霊の加護を受けていらっしやい
ます。本日戴冠式、即位式を行いました。北にリイン山脈を超えて
火の精霊の加護を受けるソルタニーエ王国、西にルルド砂漠を越
えて月の精霊の加護を受けるルグルス皇国、太陽の精霊の加護を受
けるシエルバ王国がございます。ルグルス皇国とシエルバ王国は主
従関係を結んでいるので、国によっては両国を合わせてルグルス王
国と数えることもありますね。ルグルスは皇国を、シエルバは王国
を主張しているので、わが国では別々の国家として扱っております。

さて、南方諸島は小国群によって構成されております。国の乱立
が激しく、この五十年ほどで滅びた国、興った国、両手で数えても
余るほどです。わが国は東と南を海に接しておりますので貿易など
の取引は多いのですが、南方諸島の海域では海賊などが多く今後の

課題点となっております」

「はい、先生」

大人しく聞いていた大賢者が手を上げた。視線の先には先ほどまで長広舌を披露していたアルフェイトのひきつった顔がある。

「先生、などお戯れでもおやめください。わたくしのことは長官、もしくはアルフェイト、と」

「じゃあ、アルフェイト。全然聞き覚えのない地名ばかりで今の一回じゃ覚えられません」

「なるほど、記憶がないならば当然だろう。アル、もう少し短く説明したほうがよいのではないか？」

「あと、王様」

「なにかな、大賢者」

「無理して堅苦しい話し方していると疲れませんか？」

「……」

「……」

「……あれ？もしかして私、何か触れてはいけない点に？」

「いや、そうではないがなにぶんこの演技をしている間に見破られたことはないのな。まあ、限られた相手にしかしたことはないがさすがは大賢者といったところか。記憶がなくとも本質を見通す力は失っていない」

「過大評価ですよ」

「アル。大賢者の前なら演技をしなくてもよさそうだと思うんだが」

「……あの、別に演技するのをやめると言ったわけではないのですが」

「ああ、単に嫌になっただけだ。というか疲れた」

「陛下。言葉づかいは大切です。現在陛下をわざわざ追い落として王位を得ようとする方はいらっしやらないようですが、人は何がきっかけで不満を爆発させるかわかりません。私と必要以上に親しいさまを見せれば狼霊府を優遇すると不満に思う貴族は多いでしょうし……」

「わかってるって」

「恐れながら、陛下が本当に理解していらっしやるかどうか」

「知ってると思うんだけどなあ」

「だからなんでそんなに自信なさそうなくせに強情なんです?」

「ほら、僕歴史が趣味だし。今までの国がどうやって滅んでいったか、結構知ってるよ」

「ああ、そうか。だったら頼むからその知識を生かしてまっとうに王として行動してくれよ!?」

「アルー、口調が戻ってるよ」

「……ああ、そうだな畜生でもお前だってさつきから威厳も減ったくれもねえ!」

クス、と笑う声にウィルトは口をつぐんだ。大賢者がほほえましそうな顔で二人を眺めている。アルフェイトも少し気まずそうに咳払いをした。

「失礼いたしました」

アルフェイトは視線を足元に戻してから謝罪をする。

「いえ、お二方とも仲が良くって結構なことだと思います。テンプレな心配性の兄さんとのんびりした弟さんですよね」

「てんぷれ? 古語の一種かな?」

「……ええと、この場合は良くあるというか、言葉からすぐに連想できるというか、そう言った意味です」

「なるほど。他の兄弟は知らないけどそういうものなんだ」

「ええ、きつと。王様のことは王様とお呼びすればよろしいので？」

「さすがに名前はね。まずいから……王様、とか陛下、とか。どちらかというと陛下のほうが正式な呼称だけど、これは基本的に民が僕を仰ぐときに使う呼び方だから嫌なら王様、のほうが」

「いえ、では陛下と。アルフェイトもそのほうが安心でしょう」

「……ええ、そうですね」

「お二方の会話から推測したんですが、陛下は即位したばかりなんですね？しかも、王となるための教育を本格的には受けていらっしやらない」

「よくわかったね？」

「アルフェイトの心配の仕方が少々奇異に感じられましたので。あと実感はわかりませんが私は『大賢者』、一言が大きな影響を及ぼす立場に居る、と」

「うん」

「その通りでございませぬ」

「私としては貴方がたと敵対する予定も理由もありませんので貴方がたの不利になることはしたくありません。のでいくつか質問をさせていただければと思います」

「とございませぬ」

「まず、私を排除しますか？」

「……直球で来るね。アル、この人結構怖いかもしれないよ」

「だまれ四番目。きちんと答えて差し上げる」

「いや、いくら王でも即答できる問題じゃないでしょ！？せめて狼霊府の長官と協議した結果じゃないと！」

「いえ、お二方の反応で大体わかりました。とりあえず怖いことにはならなさそうですね」

質問の内容からして危機感を持たないわけではなさそうだったがのんびりと杯からお茶をすすっている姿を見ると脱力してしまう。やっぱり狸よりの人間なのかもしれない、とウィルトは眉間をもんだ。王になる予定も野心もなかったはずなのになんで僕はこんな苦勞をしなくちゃいけないんだろう。来年のルルド方面の遺跡調査隊に参加するつもりだったのに、無理になつたし。

「では次に。狼霊府、というのは宗教の総本山のように聞こえるのですが、王家や貴族とはどのような関係を築いているのでしょうか」

「相互不干渉、と言ったところかな。この国に王を超える立場はない。『大賢者』がどうなるかは別問題だけどね」

「多分賢者と変わらない扱いをすべし、ってことになると思うぞ」

アルフェイトが口をはさんだ。吹っ切れてしまったのかなんのか、口調はいつもの少し乱暴なものになっている。

「賢者つてのは権力を持たない名誉職で、狼霊府が人事権を持つている。狼霊府の管轄は国の祭祀と狼霊府の運営全般、あと賢者の選定だ。権威はあるんだが意外と法に基づいた影響力はないし、そも政治に携わることなかれと自らを戒めている。」

賢者は権力がないが、身分は高い。政治的な影響力も強い。多くは長年貴族院で役職についていた人間か、こちらの長老院で役職についていた人間が引退した後に就いていて、王に対する助言なんかをする仕事だと思われるな。年金が出るから仕事から解放されて趣味に没頭するのもあるし、真面目にがんばるやつもあるし、まあそこは人それぞれだ。今はちょうど八人が賢者に認定されている」

「ふむ、なるほど。政教分離ですか、争いはないのですか？」

「狼霊府は王に忠誠を誓い、王は狼霊府を尊重するという題目は守られている。ソルターニエ王国では国土の約三割が赤狐殿せうこてん……この国の狼霊府のようなものだが、その直轄地となっている。そのため、土地から上がる税収で少々険悪なようだが、狼霊府は土地を持たん喜捨には税がかからんが、権力を握りにくい体制になっているためこれからも急激に関係が悪化することはないかと思う」

「なるほど。では次に。私を『大賢者』として公けにする予定ですか？」

「悩んでるとこ。貴方に大賢者としての自覚がないならその立場を

強要するわけにはいかない。特典は多いけど、多分大きな責任というか重圧がかかると思うし」

「お気遣いありがとうございます。でも私が知りたいのは貴方にとって有利か不利かなのです」

「微妙なところなんだよ、本当に。そもそも大賢者は今でもなおこの国を見守っている、これは常識なんだ。信じる、信じないじゃないかってそういうもの。事実、僕たちだって貴方が溺れそうになっただかいう部屋で儀式を行ってだし、あの水こないだまで氷だったんだけどね、その氷の下にいた貴方が大賢者で、生きているものだと思し識してたから」

「……氷漬けの人間が生きていられるものでしょうか」

「まあ、現実問題として貴方は今僕やアルと会話してるわけで。生きていられるんじゃない？ふつうはダメだけど、多分魔法を使ったんだと思うな」

「魔法ねえ」

「貴方も使えるでしょ？その狼は貴方の使い魔みたいだし」

大賢者の髪を乾かしているランナーの横でおとなしく伏せの体勢でいた狼は大賢者の顔を見上げた。何かを期待するように眼を輝かせている。

「その狼、人語を操れるはずなんだよね。多分今は能力が制限され

てるんだ。真名を呼んであげたら制限が解けると思っただけど」

大賢者は妙な表情で狼を見下ろした。

「私の言葉がわかりますか」

狼はうなずいた。

「陛下のおっしゃったことは本当？」

また頷く。

「名前を呼んでほしい？」

また頷く。さっさと呼んであげればよいのに、とウィルトは少し狼に同情する。

「すみませんね、名前おぼえてないんですよ。とりあえず狼さんと呼ぶのも味気ないですし……狼なんだからロウと呼ばせてもらいます」

くうん、と悲しげに鼻を鳴らした狼はもたげていた頭を両足の間に戻した。伏せの体勢から丸くなって悲しさを全身で表しているように見えた。さすがの大賢者も哀れに思ったのか、慌てて言葉を続けている。

「ああ、思い出したらすぐに呼びますから。それまでの仮の名前で。それでも駄目ですか？」

はあ、と人間くさくため息をついた狼は立ちあがってから大賢者の手を舐めて、また伏せの体勢に戻った。おそらく承諾の合図だろう。

「話題がそれだな。狼霊府として、んでもって俺自身としては大賢者が目覚めたことを公開してもしなくても構わない。そもそも大賢者が目覚めるのはこの国が危機に陥った時と言われていたから、そちらの対策のほうが問題だ。取り立てて危機、という問題は生じていないはずなんだが」

「ただのイレギュ……間違いかもしれませんが。記憶に不備がある時点でおかしいですし」

「そうだね。でもまあ、何かが起こってからじゃまずいから調査はさせるけどね。貴方はどうしたい？僕としてはどちらにしても構わないんだよ。例えば大賢者として僕の王権を補強してくれるならありがたい。でも権力争いの道具にはなってしまうだろうし、こう言っただけで将来僕と敵対する心づもりの人間に利用されないと限らない。」

公けにしなかったからと言って情報が漏れないとも限らないしね。こちらとしても貴方が大賢者である以上身の安全は保障するし、何より無事でいらわないと困るんだ。傷ついたらい傷ついた僕に対する攻撃材料になるんだよ」

記憶がないためこの性格なのかそれとも元々そうだったのか、ウルトの目の前に座る大賢者は少しかり不躰なことを言っても怒ったりしない、むしろ正直に話したほうが心証が良いだろうと思わせる人間だった。この性格で大賢者としての記憶があれば即座に腹心として取り立ててもよいだろうと思わせる人物だ。

「目覚めたこと自体が厄介と言ったところですね」

「正直、そうだねえ」

「おいこら四番目。失礼だぞ」

「こつ言つことは取り繕わないほうがいいよ。厄介だとは思っけど迷惑ではないし」

「ええ、アルフェイト。私としても裏で心配されたり計画を立てられたり操られたりするよりは自分から謀に参加したいと思うので言いづらいことでも言っていただけと嬉しいですよ」

「そうか。なんというか、狼霊府の人間としては複雑だ」

「複雑？」

「水の精霊を祀っているが、信仰の対象として大賢者も含まれてるからな」

「……つまり私ですか」

「ん」

「それは複雑でしょうねえ」

「ああ、でも偶像をあがめるつもりもないから別に大賢者らしく振舞う必要はないぞ」

跪いていたアルフエイトは何かをふっ切ったように立ち上がり、勢いよくウィルトの隣、自分の寝台に腰かけた。そのまま低い机に手を伸ばして杯をとる。茶がぬるかったせいが一瞬顔をしかめ、そのまま飲みほした。

「公式に発表はせず、私を大賢者として扱うことは可能ですか？」

空になった杯を手の中で転がしながら大賢者はウィルトに問いかける。具体的にどういうことだろうというウィルトの疑問を察したのか、彼は言葉を継ぎ足した。

「つまり、公式な発表はしない、しかし私に衣食住を提供する際に偽りの身分を作らないということですよ」

どうだろう、とウィルトは首をかしげる。具体的にどの程度の衣食住を大賢者が求めているかによるが、あまり贅沢なものでなければ用意はできるはずだ。即位して早々に身元不明の人間を保護するのは少しばかり外聞が悪いかもしれないが、致命的なほどではない

だろう。

「具体的に、いつまで？王が一人を優遇するのは長引くとまずい。長引かなければいいけど」

「最長で三十日。それまでに記憶が戻れば戻り次第。戻らなくてもそれだけの日数があれば自分の能力の程度を把握できると思うので」

「なら構わない。文句をいう人間は黙らせるし、ある程度行動の自由も保障する。使用人は十人程度になると思うけど。アル、『大賢者』を住まわせるとしたらどこ？」

「難しい問題だな。狼霊府には客間がないから俺の部屋を譲っても良いが、確実に王より位が低い人間の部屋だからな」

「え、いや、場所にはこだわりませんけど」

「甘い。後で大賢者だと公表するつもりなら認識しておけ、身分とはそういうものだ。知らないだろうから教えておくがな、貴族たちは自分の晶宮がどれだけ王の狼宮に近いかが自慢の種にも争いの種にもなる」

「それはまた強烈かつせせこましいことで。私としては寒さ暑さと夜露がしのげて一日最低二食、ついでに服を七着ほど提供されれば文句は言わないつもりだったんですが」

「……本気？」

「何かおかしいですか？」

「それだと結構部屋が小さくても良いってこと」

「もちろんです。先ほど使用人、とおっしゃっていましたが質問に答えてくれる人が一人いれば十分ですよ」

「え。着替えとかお風呂とかどうするの？」

「それくらい自分一人でやります」

「出来るの？」

「この型の服でしたら一回きましたから着方はわかりますし。風呂は一人で入るものだと思っていたのでおそらく記憶をなくす前からそうだったのではないかと」

「……なんか平民っぽいよね。行動とか。なくしてない知識とかモノの考え方は貴族寄りなんだけど」

「大賢者って貴族なんですか？」

「あー、言われてみりやそうだな。エウイト王の友人としか書かれてないし、そもそもこの国の成立前の人間だから今でいう貴族たちは存在しなかったんだよな」

「盲点だったね」

ウイルトは少し感心しながらアルフェイトと呟きあう。貴族と平民には大きな差があるが、その差を作る前に彼は存在していたはず

なのだ。そりゃあ常識も違うはずだ。

「でも、それで良いんだつたら狼宮の庭に四阿あふまやがあるんだけど」

「四阿ですか？」

「とはいっても結構立派だよ？三代前の王が作らせたものでね。執務に疲れたと思った時の避難先だったらしい。今でも掃除は欠かしてないはずだから調度品を少し運び込ませれば快適に過ごせると思う」

「あそこか。悪くない。料理人を一人と」

そこで不意にアルフェイトは言葉をとぎらせた。大賢者の髪を乾かし終わったラナーは布を畳み腕にかけ、扉の脇に控えていた。

「ラナー、話は聞いていたな？」

「はい、伺っております」

一礼してからラナーは答えた。水色の髪に水色の瞳をしたまだ少女と言える年齢のようだった。

「大賢者、かまわなければ使用人として彼女をつけたい。正式にはこちらの巫女だから水霊との交感能力が高いし、もともとが貴族の

出身だからそつちの不文律にも詳しい。何より察しが良いし、性格が良いし、口が堅い」

「よろしいのですか？貴方の付き人をやっていたのでは？」

「俺は構わない。ラナーはどうだ」

「光栄でございます」

頭を下げたままラナーは答えた。

「なら決まりだね。ラナー、だっけ？よろしく」

「この身をもって仕えさせていただきます」

「おい、威厳ある王の仮面はどうした」

「今さらだよな。大丈夫、普段はちゃんとするから。大賢者のことはなんて呼べばいい？」

「何が適当なのでしょう？」

「名前か『大賢者』かなあ、やっぱり。賢者は一の賢者、二の賢者って賢者になつた順に呼んでるし」

「なら大賢者でお願いします。もし人前で呼ぶことがあつたらおい、とか貴殿、とかそう言った呼び方だとうれしいのですが」

「わかったよ。それでは、大賢者。貴殿の身に何があり現状に至ったのが理解できれば身の振り方の参考にもなるう。それまで貴殿は我が保護下にあり、貴殿に加えられる攻撃、侮辱は我、ひいてはこの国への攻撃、侮辱となる。逆にいえば貴殿の行動が我を測る指針になるのだ。心せよ」

「御意にございます。私は大賢者として、そして陛下の保護下にあるものとしてふさわしい振舞いを心がけ、貴方とこの国の為になるように努力いたします」

第二話 王様、大賢者を拾う（後書き）

というわけで、大賢者が仲間入り。

一応こちらとしては主人公は王様と大賢者のつもりなのに名前不明、記憶なしでしばらくはなしが続きます。

感想、批評、誤字脱字報告などありましたらよろしくお願いいたします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9627m/>

ウィステルアーウィ王国物語

2010年10月11日23時27分発行